

氏名	足立 章子 (アタチ アキコ)
本籍	長野県
学位の種類	博士(学術)
学位の番号	博乙第15号
学位授与の日付	2016年9月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	日本語聴解テストにおけるテスト・アイテム分析と聴解行動ーアカデミック・リスニングの視点からー

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	宮副ウォン 裕子
	(副査) 桜美林大学教授	堀口 純子
	桜美林大学教授	齋藤 伸子
	東京外国語大学教授	伊東 祐郎

論文審査報告書

論文目次

1章 序論	1
1.1 本研究の背景	1
1.2 本研究の目的と意義	7
1.3 論文の構成	8
2章 言語テストの概観	11
2.1 言語能力の定義と言語テストの変遷	11
2.2 言語テストにおけるコミュニケーション能力	14

2.3	集団規準準拠テストと目標基準準拠テスト	15
2.3.1	集団規準準拠テスト	16
2.3.2	目標基準準拠テスト	17
2.4	日本語能力試験と日本留学試験	19
2.4.1	日本語能力試験	19
2.4.2	日本語能力試験 聴解	20
2.4.3	日本留学試験	30
2.4.4	日本留学試験 聴解	32
3章	聴解テストで測定される要素	36
3.1	アカデミック・リスニング	36
3.2	聴解能力と聴解テスト	38
3.3	聴解下位スキル	41
3.4	テストの入力ファセット	45
3.5	聴解の質的研究方法	50
4章	聴解テスト・アイテムの基礎的データ	52
4.1	基礎的データのための分析枠組み	52
4.2	結果と考察	57
4.2.1	理解の種類	57
4.2.2	場面	59
4.2.3	形態	63
4.2.4	トピック	64
4.2.5	人数	64
4.2.6	コミュニケーションの目的	65
4.2.7	機能	66
4.2.8	情報を得る理由	69
4.3	テキスト・バンクの提案	69
4.3.1	アイテム・バンク	69
4.3.2	聴解テスト・アイテムの作成のためのテキスト・バンク構築	71
4.4	改定前2002年版と2010年改訂版の比較・考察	76
4.5	結論と今後の課題	89
5章	聴解テスト・アイテムのスク립ト分析	92
5.1	研究の枠組み	92
5.1.1	文法的知識	96
5.1.2	テキスト知識	96
5.1.3	機能的知識	98
5.1.4	社会言語学的知識	98

5.1.5 方略的能力	99
5.2 分析対象と分析方法	100
5.3 結果の分析と考察	104
5.3.1 文法的知識	105
5.3.2 テキスト知識	106
5.3.3 機能的知識	109
5.3.4 社会言語学的知識	111
5.3.5 方略的能力	112
5.4 選択肢	113
5.5 結論と今後の課題	114
6章 テスト時の聴解行動（設問あり）	118
6.1 テスト時の聴解行動の研究目的	118
6.2 研究の枠組み	118
6.3 データ収集と分析の手順	120
6.3.1 対象者	120
6.3.2 対象アイテム	121
6.3.3 データ収集と分析の手順	122
6.4 留学生の聴解行動の分析結果と考察（設問あり）	123
6.4.1 全体	126
6.4.2 状況説明	128
6.4.3 プリタスク	129
6.4.4 本文	130
6.4.5 本文終了時	135
6.4.6 ポスト・クエスチョン	136
6.4.7 選択肢	136
6.5 日本人大学生の聴解行動の分析結果と考察（設問あり）	139
6.5.1 全体	140
6.5.2 状況説明	141
6.5.3 プリタスク	142
6.5.4 本文	144
6.5.5 本文終了時	148
6.5.6 ポスト・クエスチョン	149
6.5.7 選択肢	149
6.6 設問があるアイテムにおける2者の総括と考察	151
7章 テスト時の聴解行動（設問なし）	153
7.1 留学生の聴解行動の分析結果と考察（設問なし）	155
7.1.1 全体	156

7.1.2 本文	157
7.1.3 クエスチョン	161
7.1.4 選択肢	162
7.2 日本人大学生の聴解行動の分析結果と考察（設問なし）	166
7.2.1 全体	167
7.2.2 本文	168
7.2.3 クエスチョン	173
7.2.4 選択肢	174
7.3 設問がないアイテムにおける2者の総括と考察	177
7.4 提案と今後の課題	180
8章 結論	185
8.1 日留試験聴解テスト・アイテムの特徴	185
8.2 日留試験聴解テストのアカデミック・リスニング能力	186
8.3 留学生の聴解テスト時における聴解行動	187
8.4 今後の課題	188
参考資料	192
参考文献	203
謝辞	211

論文要旨

本論文は、言語テスト、特に公開大規模日本語テストの項目開発にかかわる研究であり、聴解テストに焦点を当て、項目開発から構成概念、および受験者の聴解行動について分析と考察を行ったものである。テスト分野の研究においては、一般的には、「妥当性」「信頼性」「実用性」の視点から検証を試みることが多い。しかしながら、本研究は、緊急課題であるにも関わらず、これまでの研究ではほとんど注目されなかった以下の3点を研究目的として設定し、下記のようなデータについて実証的な分析・考察を試みた点が特徴と言える。

- 1) 日本留学試験（以下、日留試）聴解テスト・アイテムの特徴を明らかにする。（2002年度から2013年度までに公開された聴解テスト・アイテム440を8つの項目により分析し、さらに改訂前（2002-2009, 320アイテム）と改訂後（2010-2013, 120アイテム）に分け比較分析・考察した）
- 2) 日留試験聴解テスト・アイテムが測定している聴解能力を、アカデミック・リスニングの視点から明らかにする。（2002年度から2006年度までに公開された聴解テスト・アイテムを5つの構成要素で分析した）
- 3) 聴解テスト時、受験者はどのような聴解行動をとっているかを明らかにする。（留

学生と日本人大学生を対象に、1アイテムごとの解答直後に、「聞いているときに考えていたこと」についてインタビューし、その文字化データを収集・分析した)

本論文は以下の8章により構成されている。第1章 序論、第2章 言語テストの概観、第3章 聴解テストで測定される要素、第4章 聴解テスト・アイテムの基礎的データ、第5章 聴解テスト・アイテムのスクリプト分析、第6章 テスト時の聴解行動(設問あり)、第7章 テスト時の聴解行動(設問なし)、第8章 結論。

上記の研究課題解明のために、膨大なデータを量的・質的の両面から緻密かつ実証的に分析した。分析にあたっては、主要先行研究(日本語および英語の文献)を十分に踏まえながら、具体例に言及し、説得力のある分析と考察を展開している。先行研究は、テストに関する世界標準の理論から、聴解テスト関連の文献、日本語大規模テストの公開資料、アカデミック・ジャパニーズに関する実践研究までおよび、当該分野の研究成果を広く深く参照している。

テスト・アイテムのスクリプト分析はRichards(1983)のリスニング・スキルの枠組みに基づき分析したが、スクリプトのマーキングは独創的でわかりやすく、汎用性が高い。聴解の授業は日本語教師が最も苦勞する科目の一つである。本研究のスクリプト分析により、現場で聴解指導にあたる教師にとって応用価値が非常に高く、留学生の日本語による講義等の理解能力を育むために役立つ資料が提供されている。今後、日本の大学における講義理解、アカデミック・ジャパニーズの枠組み作りにも有益な貢献をするものと思われる。日留試の改訂前(2002-2009)と改訂後(2010-2013)の比較分析により、改訂により改善された点、および今後改善が望まれる点が明確に示されており、これからの研究の進展の可能性が窺える。

論文審査要旨

本論文の学術性や論理性について、審査委員会委員全員が特に優れた点として指摘したのは、以下の4点である。1) 日本留学試験の聴解テストを取り上げ、アカデミック・ジャパニーズ、特に聴解能力の構成概念を明らかにしようとした点がきわめて独創的である。特に大規模試験問題の比較考察は、言語教育観の変化にも言及した貴重な論考と言える。2) 日本の大学で求められる(学術)言語能力を分析および記述化しようとした試みは、今後のテスト項目の開発に大きな貢献ができると考えられる。3) 受験者の聴解行動について詳述した論文は非常に少なく、音声という出題形式をとる聴解テスト受験時における受験者心理をわかりやすく分析した点は貴重な資料となりうる。4) 主要先行文献を網羅し、質的・量的分析手法(スクリプト分析、M-GTAを基礎とした構造構成的質的研究法など)を総合的に採用したことは当該領域の研究への新たな可能性を提示している。

公開大規模テストの場合、テストの機密や倫理の問題があり、問題の解明を行うのには今後も困難が伴うと予測されるが、本研究の成果が果たす役割は大きい。今後の研究課題として、審査委員より次の点が提案された。1) テスト・アイテムの精度自体の研究が望まれる。2) 項目分析を行ったうえで、困難度や識別力を踏まえた分析が期待される。

以上のように、本論文はその独創性、学術性、論理性、労作性などから見て、当該研究領域および教育現場における大きな貢献をもたらす優れた課程外博士論文であると、審査員全員一致で合格と判定した。

口頭審査要旨

公開試問の最初の 30 分間は、本人がパワーポイントを用いて口頭発表を行った。研究の背景、研究課題、スクリプト分析の手法、枠組みの提示、結論の提示、提案、研究の限界と今後の課題など、わかり易い視覚資料を提示しながら、論文について詳細な説明を行った。

試問後半の 30 分間は質疑応答であった。審査委員会の副査 3 名より、上述の論文審査要旨に述べたような指摘や質問があったが、本人は質問に対して落ち着いた態度で答え、自身の研究領域に関する学術的知識を十分に有していることが確認された。審査の結果、課程外博士論文としての水準に十分に達しており、課程外博士の学位を授与するに十分な学術的知識、および、今後自立して研究を継続発展できる能力を有することが確認され、審査委員全員一致で合格と判定した。

公開試問当日は、桜美林大学大学院院生・修了生、LA 学群生(日本語教育専攻 4 年生)、学外からの出席者など合計 14 名が出席した。